

## ▼書評

ノルベルト・フライ著（下村由一訳）

『1968年——反乱のグローバリズム』

（みすず書房、二〇二二年四月、二八三二〇頁、三六〇〇円＋税）

西田 慎

### 1

近年「一九六八年」「一九六〇年代」は、ますます歴史学の研究対象になっていと言えよう。一九六〇年代に世界規模で吹き荒れた若者や学生による抗議運動は六八年に頂点を迎えたことから、「六八年革命」「六八年運動」と呼ばれ、政治や社会を大きく変えた転換点として、「一九六八年」「一九六〇年代」がしばしば象徴的に語られる。

とりわけ最近、当時を知らない若い世代（六〇年代、七〇年代生まれが多い）による研究が増えている。その多くは歴史の転換点としての「一九六八年」「一九六〇年代」をきちんと解明したいという動機から出ているようだ。「一九六八年」「一九六〇年代」を歴史として書ける世代がようやく出てきたということであろうか。

こうした傾向はドイツも同じである。九〇年代半ばまでは関係者による回顧録の類が多かったが、九〇年代末になって「一九六八年」の本格的な研究が始まった。九八年に『一九六八——出来事から歴史学の対象へ』という題名の本が出たことは象徴的である。ドイツの「一九六八年」研究は、「かつては参加者の視点から書かれた回顧録の文献が支配的だ

ったのが、ここ数年はますます学術的な専門文献や洪水のような博士論文によって補われつつある」（ミヒャエル・Th・グレーフェン）状況なのである。

### 2

本書は Norbert Frei, 1968. *Jugendrevolte und globaler Protest*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 2008 の全訳であり、ドイツだけでなく、フランス、アメリカ、日本、東欧諸国等の「一九六八年」を詳細に分析することで、『一九六八年』とは結局何であり、何を残したのかを明らかにしようとしたものである。著者ノルベルト・フライは、ナチズム研究や戦後の「過去の克服」に取り組むドイツの現代史研究者として、日本でもよく知られている。世代的に言うと五五年生まれで、六八年当時は一三歳、運動に参加した経験はないようだが、当時を全く知らないわけでもない微妙な立場であろう。本書の構成は以下の通りである。

（序章） パリ、一九六八年五月

1章 はじめにはアメリカがあった

2章 ドイツ固有の道？

3章 西側世界での抗議運動

4章 東欧での運動

5章 なんだったのか、なにが残ったのか

以下、各章の内容を簡単に紹介しておこう。

序章（と銘打たれていないが）ではまず、パリの五月革命が取り上

げられる。パリのナンテール大学の紛争で、それは始まった。やがて運動はソルボンヌ大学に飛び火し、バリケードを築いた学生と催涙弾やガス弾を放つ警官隊との間で市街戦となる。フランスの「六八年」の特徴は、学生と労働者間の連帯が一时的に実現したことである。労働組合は学生に連帯を表明してストに入った。やがてその要求は単なる労働条件の改善を越え、ド・ゴール大統領の退陣と「人民の政府」樹立を求めるようになる。そうした中で、突如ド・ゴールが失踪した。後にドイツのバーデン・バーデンを訪問していたことが明らかになるが、騒乱の首都を離れて保養地で休養することが目的だったのではと著者は推測する。やがてパリに戻ったド・ゴールは国民議会の解散と選挙の実施を発表した。ストと工場占拠は収束し、六八年六月末の国民議会選挙ではド・ゴール派の圧勝と左派の大敗で終わる。

第1章は、アメリカの「六〇年代」を扱う。六〇年二月、白人専用のランチコーナーでコーヒートを断られた黒人学生四人が座り込む事件が南部で起きた。公民権運動の端緒である。やがて運動はシット・イン・ムーブメントと呼ばれ、非暴力直接行動を説くキング牧師の下で全米へ拡大していく。六三年の「ワシントンへの行進」で頂点に達した後、六四年の公民権法と翌年の投票権法の成立に結実した。しかしその後、黒人の一部は非暴力理念に飽き足らず、急進化の道を歩み出す。都市での黒人暴動やブラック・パンサー党はその産物である。

一方、公民権運動は学生にも刺激を与えた。彼らは「民主的社会のための学生連盟」(SDS)を結成し、六二年にポート・ヒュロン宣言を発表する。そこに盛り込まれたのが「参加型民主主義」である。六四年には、カリフォルニア大学バークレー校で大学紛争が始まり、六八年のコロンビア大学の紛争は、負傷者約一五〇名、逮捕者七〇〇名を出す

事態となった。

他方六五年頃からアメリカの抗議運動の中心になったのが、ベトナム反戦運動である。それが頂点に達したのが、六八年一月の民主党大統領候補を指名するシカゴでの党大会だった。会場前の反戦デモ隊に警官隊が情け容赦ない弾圧を加え、死者が出なかったことは奇跡だと語られるほどの激しい衝突になる。この「六八年シカゴ」を機に、SDSを割って武装闘争を開始するウエザーマン、秘教の世界に引きこもるヒッピー、さらにウーマン・リブ、グリーン・パワー、ゲイ・パワー、グレイ・パワーと運動は分岐・多様化していった。

第2章は、ドイツの「六八年」を論じる。ドイツの場合、「克服される過去」への批判が出発点となって、世代間の乖離が現れたのが特徴だと著者は言う。五〇年代までは、両親の世代はナチスの過去に沈黙していたし、大学でもナチスをテーマに取り上げることが不可能だった。しかし六〇年代に入って、学生からそうした沈黙への批判が出てくるようになる。また五〇年代以降西ドイツでは、ドイツ連邦軍の核武装化反対運動のように活発な抗議文化が芽生えていた。そして六六年に大連合政府が成立し、元ナチ党員のキージンガーが首相に就くと、西ドイツの民主主義が重大な危機に晒されているとして、議会外反対派(APO)が活発化する。政府の緊急事態法に対する反対運動も強まり、ドゥチュケをリーダーに「社会主義ドイツ学生同盟」(SDS)が、運動の主導権を取るようになった。

著者によると西ドイツの「一九六八年」は、六七年晩春に始まり、ほぼ一八か月続いた。六七年六月に、イラン国王夫妻のベルリン訪問反対デモが警察との大規模な衝突に発展し、学生が射殺された。これを機に、運動は西ドイツ全土へ広がっていく。翌年にはドゥチュケへの銃撃

事件まで起き、反発した若者は復活祭騒乱を起こした。しかし同年五月、連邦議会が緊急事態法を可決すると、反対派は勢いを失っていく。加えてワルシャワ条約機構軍によるチェコスロヴァキア侵攻は、プラハの修正共産主義に希望を抱いていたドイツの六八年世代を幻滅させた。最終的にSDSは内部対立もあり、七〇年春に解散する。結局ドイツの「六八年」は何を残したのか。それは生活のほとんどすべての領域に及ぶ「社会全体の変化」である。さらにこうした変化はドイツ固有の道ではなく、洋の東西を問わず、工業社会ならどこでも起こったのだと著者は述べる。

第3章では、西側諸国の「六八年運動」が分析される。とりわけ暴力の噴出が目立ったのが日本とイタリアである。日本ではベ平連のような暴力とは距離を置く運動がある一方で、反代々木派全学連は警察との激しい衝突も辞さなかった。大学紛争でも、参加学生数や暴力の度合いにおいて、同時期の欧米の大学をはるかに凌駕していたと著者は述べて、その理由として日本の学生の組織率の高さを挙げる。他方イタリアでは、六五年に政府が出した大学改革案を機に大学紛争が激化した。改革案が議会で潰れて紛争が退潮すると、一部の活動家は労働者との連帯を求めて、工場へ入っていく。ストや工場占拠が続くが、六九年一二月の爆弾テロが多くの死者を出したこと、金属労働組合が賃金協定締結に成功したこともあり、「熱い秋」は終わった。活動家の一部は、その後左翼テロリズムへ向かう。結局イタリアで「六八年」と言えば、今日まで主として一連の政治事件のことと理解され、その後一〇年間に及ぶ暴力の時代の幕開けと見なされているという。

一方「六八年運動」が、より強く文化面で現れたのがオランダとイギリスである。オランダでは六五年に「プロフォ（挑発者）」と名乗る小グループが活動を開始した。個人の自立を重視しながら、社会を挑発

し、抵抗していくという、自己解放による社会の解放を目指した。七〇年三月には「カバウテル（手伝い小人）」が登場し、それに続いた。空き家占拠で人気を博し、七〇年六月のアムステルダム市議会選挙では得票率一％、五議席を獲得するに至る。全体としてオランダの「六八年運動」が、狂信やテロリズムに走ることなく終わったのは、この国の寛容さ、国家の権力機関が悠然と構えたことと関連すると著者は指摘する。他方イギリスでは六六年秋に最初の大規模な学生の抗議が展開され、六七年から六八年にかけて大学ストライキも各地で起こるが、多くは劇的な経過をたどることもなく終わった。しかしカウンターカーチャーでは他国を凌駕する。五〇年代末から六〇年代に至るまで、ロンドンほど芸術、ファッション、文学、そして音楽で新しく若々しい様式のさまざまな成分がみごとに結合したところはなかったという。

第4章は、東欧諸国の「六八年」に焦点を当てる。まずチェコスロヴァキアでは六八年一月、共産党中央委員会第一書記に就任したドゥプチェクの下で、新聞雑誌の統制緩和や五〇年代の粛清に関する調査の開始等、共産主義の改革が進められる。「プラハの春」である。これに対しソ連は警戒感を強め、最終的に同年八月ワルシャワ条約機構軍を軍事介入させて、「プラハの春」を終焉させた。一方ポーランドでは、六八年一月、ポーランドの国民詩人アダム・ミツキエヴィチの演劇上演中止を批判して学生が立ち上がった。やがて抗議は首都ワルシャワを越えて、拡大する。学生運動の指導者にユダヤ系が少なくないことを見た政府が、メディアを利用して大々的な反ユダヤ主義キャンペーンを展開した結果、翌年夏までに芸術家、学者、大学教授、知識人を含むユダヤ人一万一千人が移住していったという。もともと運動は完全に終焉したわけではない。八〇年代に労働組合「連帯」が闘争を開始した時、当時の

学生運動の活動家が再び表舞台に登場してきたからである。他方東ドイツの「六八年」は、六五年一〇月のライプツィヒでの「ビート蜂起」で始まった。県評議会がビート音楽を事実上禁止したことに抗議する若者のデモが警察の激しい弾圧を受け、二六七名の逮捕者を出したのである。また「プラハの春」に対するワルシャワ条約機構軍の介入に激しく抗議したのも、若者だった。彼らの中にはドイツ社会主義統一党高級幹部の子弟も多数含まれていたという。結局東欧では「プラハの春」が挫折し、希望が打ち砕かれた「六八年」の後、サブカルチャー、多様な「閉じこもり社会」の形成が、西欧より強く促されたと著者は指摘する。

終章の第5章では、「六八年」とは何だったのかを考察している。世界の「六八年運動」は全体として、快樂主義的なものでも、全体主義的なものでもなく、ヘルマン・リュベの言う「政治的ロマン主義への回帰」であったという。一方ドイツの「六八年運動」はどう評価されるだろうか。著者は西ドイツの運動が他国と比べて過激で世間知らずだったとする。「ドイツ固有の道」テーゼは間違いだ、ドイツに特有のものが見られたとするならば、ナチスの過去との関連を常に問い続けたことだと指摘する。そして結局ドイツの「六八年運動」は何を残したのか。議会制民主主義の廃止に失敗したという点では「政治的に全面的に破綻した」。しかしこの次元より下の部分、解放、参加、透明性の点では、多くの前進が見られたという。すなわち両性間の同権と周縁社会集団の権利の拡大。政党、労働組合、教会、団体の「下部」の発言権の増大。国家と地方団体の行政行動における公開性と説明責任の拡大。警察の民主化。そして反原発運動のような草の根運動の拡大である。そうした意味で「六八年」以後はほとんどなにひとつ、もとのままではなくなった」と著者は結論する。

### 3

以上が本書の内容であるが、それを踏まえた上で、気になる点をいくつか挙げてみたい。

アメリカ、ドイツ、フランス等各国の「六八年運動」を取り上げ、それを世界史の中に位置づけようとした本書は、そうした試みが日本では少なかっただけに、邦訳されて日本語で読めるようになった意義は大きい。特にオランダ、イギリス、ポーランドといった国の「六八年」は、これまで日本ではほとんど紹介されなかっただけになおさらである。一方、欧米以外で扱われているのは日本のみであり、いささか欧米中心主義である点も否めない。例えば中国の文化大革命は、多くの信奉者を各国の「六八年運動」で生み、手法が模倣されたことから、取り上げるべきではなかったか。

また我々としては、日本について書かれた第3章第1節も興味深いところである。もっぱら英語とドイツ語の史料に依拠して書かれた同節は、一読する限り概ね正確であると感じた。運動の負の遺産である内ゲバにも、きちんと触れられている。ただし著者は、日本の新左翼に詳しいアメリカの社会学者パトリシア・スタインホフの研究を参照して、七〇年代半ばまでの内ゲバの死者を四四人としているが、六九年から〇一年までの死者は一一三人に上るといふ別の研究もある<sup>3</sup>。他国でほとんど見られなかった内ゲバが、なぜ日本では多くの死者を出すまでに至ったのかという問いは、今後とりわけ日本の研究者が答えていく必要があるだろう。これも関連するが、「六八年運動」と暴力の関係はドイツでも常に論争的になってきた。「六八年運動」の一部が左翼テロリズムに走ったのが、ドイツ、イタリア、日本といった旧枢軸国であるのはなぜなのか。著者は、その背後に「過去の克服」をめぐる摩擦があるのではと示

唆するが（一六三頁）、具体的な答えは示していない。しかし外務省の独立歴史家委員会メンバーとして、外務省のナチス・ドイツとの癒着と戦後西ドイツへの連続性を調査する等、「過去の克服」に取り組んできた著者だからこそ、ここはもう少し踏み込んでほしかった。

以上、本書の概要を章ごとに紹介した上で、所感を述べてきた。たしかに本書は特に目新しいことを言っているわけでも、刺激的な議論を提供しているわけでもない。しかしグローバルでトランスナショナルな世界革命といわれる「一九六八年」の概要をつかむには、本書をおいて他にあるまい。同時代として体験した全共闘世代にも、当時を知らない若い学生にも一読をすすめたい。

## 注

- (1) Ingrid Gilcher-Holey(Hg.), *1968 — Tom Ereignis zum Gegenstand der Geschichtswissenschaft*, Göttingen, 1998.
- (2) Michael Th. Greven, „Jubiläumsliteratur —, 1968‘ und die ‚68er‘ als Erinnerungsort und aktuelle Projektionsfläche“, *Neue Politische Literatur*, Jg. 53, 2008, S. 195-204, hier S. 195.
- (3) 小西誠「なぜいま内ゲバの検証が必要か」、いいたもも他『検証 内ゲバ』社会批評社、二〇〇一年、五一—一九頁、ここでは六一—七頁。  
(にしだ まこと・神戸大学非常勤講師)

